散善義を通して見たる善導大師

千葉良導

私は「散善義を通して見たる善導大師」と云ふ題を課せられた。然し私共にごうして充分に之を云ひ顯はし得られよう。曠劫以來、無明に閉されて居る小さい不完全な見濁增のお互共が、筆にしろ口にしろ、兎や角と列べ立た所が只偉大なる御德を少さくし、その尊嚴を冒瀆するのみではなからうか。それ等を考へた時には筆を投じ口を緘し全く沈默して、宗祖が「仰いで本地をたづぬれば四十八願の法王なり」と仰せられたあの尊い合掌のお姿のみが拜がまれて來て、歸命合掌するより外はないのである。そうなると摩訶衍に於て千二百五十年の記念號を企てられた折角の芳志に酬ひられぬ事に立ち至る。然かし又一面弟子として師の功勳偉德を追慕し子として親の言行を偲ぶこと、これまた自然の人情止め難き所なので此意味に於て心を取り直して散善義を拜讀した。すると御性格から主義、思想、信念なぎ、また宗祖が「偏依善導」と仰せられた事から、記主禪師が「今家」と呼びかけられた譯合ひなぎ、又善導大師御自身が「某今欲古今楷定」と奮起遊ばされたお姿や、造疏の證驗を仰がれた眞劍嚴肅なお姿、三心細釋に就て尊き御心の動き工合、二尊大悲の體驗のお姿なぎ次から次へと顯はれ給ひ、この課題の餘りに大いのに驚きやがて結局はもと〳〵通りの至心歸命、恭敬合掌より外に道がなくなつた。そこで今私は斯く散善義を拜讀して遂に歸命合掌の結局に立ち至つたその筋道の大略を述べて、今回の責任を免れさせて頂ふと思ふ。

散善義を拜讀して先づ第一に氣付くのはかの序分義や定善義と同樣に此散善義も觀經の文相を追ふて解釋せられたので、所謂玄義に對する文句に當り居るにも拘らず其釋呈の上に於て諸師の釋と大いに其趣を異にして居る事である。導

師に於ては、諸師等の如く文相を追ふて此文字はこう解釋するのであると云ふ事丈ではなく、之れで無くば二尊大悲の精神が顯はれない、卽往生淨土の道はこれでなければならぬと、本願大慈悲の思召を根本基調として釋出遊ばされて居る。それで諸師の種々な說に對しては他の事なれば默しても居られようが、之れ丈けは明かに顯はさねばならぬと云ふ心持で進まれた。そこが所謂古今楷定の思召である。この古今楷定の思召が後の三帖(序、定、散)中殊に此散善義に於ては顯著である。卽十一門義、就中三心の細釋、行業の整理、九品皆凡、一經の元意本願念佛流通等これである。

扨て散善とは吾々お互ひ卽欲界散地の凡夫が生れつきの儘の心(散心)を以て修する善根の總稱であるが、今此に所謂散善とは、同じく散心を以て修する善根ではあるが、往生極樂の爲に修する諸種の善根を云ふのであつて卽ち三福九品の行業である。諸師は此散善までを韋提の致請とし、十六觀中、後の三觀(十四、十五、十六、)までをも他生觀と名け或は徒衆觀と呼んで全部定善に屬せしめた。導師は「十三定善韋提の致請、三福九品を散善と名け、是れ佛自開の法門なり」と判釋して、經の元意釋尊の大慈悲は末世散機の凡夫にある事を顯彰された。そこで今此の釋に於ては初に三福を釋し次に九品を辨ぜられたが、九品を釋するに當つて告命、其位、有緣、三心等の十一門義を立て、此の十一門義が九品の一々具すべきものなる事を論じ、從て三心は九品全部に通ずる往生の生因であるとお述べになつて、八紙半二百餘行の永きに亘つて三心を細釋し淨土往生の行業を整理し本願念佛の一行專修を高調して、今時吾々衆生の往生淨土の道を開顯して下さつたのである。宗祖が偏依善導と仰せになり立敎開宗遊ばされたのも、記主禪師が今家と呼びかけられたのも、又「善導は信の一字より淨土を立て、元祖は故の一字より淨土を開く」と云ひ傳へられて居るのも皆之等の邊にある事と首肯される。

三心は所謂「辨定三心以爲正因」として往生の要術、一經の樞鍵、出離の最要であるから三經三佛の元意を基準とし吾

々衆生に對して確實に具足し確固不拔何等動搖なきよう各種の方面に亘りて、力を窮め心を盡して懇切に勸め給ふ所なりとは雖も、其處に善導大師の御氣分が顯はれ御性格の一端をお察し申上ぐる事が出來る。

先づ第一に至誠心を釋するに勸誡二門に亘つて往生を願ふこころ根は至誠眞實でなければならぬと三業の不調と雜毒の行爲とを痛く嫌はれてある處に、御性格のいと嚴肅な三業相應の正しき御姿を拜することができ、而かも唯肅正に過ぎて偏狹ならず溫情融和を旨とし「若非善業、敬而遠之、亦不隨喜」とて、反對の者に對しては折伏鬪爭を敢えてし給はず敬遠主義をお取りになつた。また懇切慈愛の特に深きこと、深心回向心の釋に於て吾々衆生に對し三心の退失傾動廻顧落道を氣遣はれ細心に言葉を窮め肝膽を碎き居らるゝ心の動きに對しては只感激するより外はない。

吾々は誰れの著作にしろ讀書の時は唯その上に叙述されたる內容の事柄や道理筋道を了解するに留まらず、文面以外に其事柄や筋道を叙述するに付けての當人の心遣ひ、心の動き工合などをじつと合味鑑賞して行く事が大事である事は今更云ふまでもないが、今この心持で三心釋を拜讀してゆくとき、深心の下に於て四重の破人に對する答辯や、又願生心の妨難に對する用意のお言葉に至りては只感激の涙滂汰たらざるを得ないのである。

扨て深心を釋するに當つて信機信法の二種の信相を明かし、三經三佛の聖意に隨順すべきことを勸め、次に就人立信と就行立信とを明かし就人立信の上に於ては「佛は是れ滿足大悲の故に、實語し給ふが故に」と云ひて信仰の基準を佛に置き、佛以外の者の說は不了義なれば信憑すべからずとて四重の破人に對する言辭を懇切に示して益々信根の窄强を計られた。

若し學解を異にし思想を異にし主義を異にせる異學異見の者多くの經論を引き來りて凡夫の往生を否定せんとせば、我も亦かの諸經論を信ぜざるにはあらず、盡く皆仰で信ず、然れども佛の彼經を說き給ふ時は處も別に、時も別に對機も別に、利益も別なり、彼經を說き給ふ時は、卽觀經彌陀經等を說き給ふ時にあらず、然るに佛の敎を說き機

に備へ給ふ時も亦同じからず、彼れには通て人天菩薩の解行を說き、今は觀經の定散二善を說きて、唯韋提及び佛滅後の、五濁五苦等の一切の凡夫の爲めに證して、生ずる事を得ゝ云ひ給ふ、之れによつて我今一心に、此佛敎に依て決定し奉行す、たゞひ汝等、百千萬億、異口同音に生ぜずゝ云ふとも、唯我が往生の信心を增上し成就せんのみ。

又例ひ地前三賢の菩薩及二乘の人の來り、又は地上の菩薩の來りて、異口同音に往生を否定すとも、一念の疑心を生ぜず、唯決定上々の信心を、增長し成就するのみなりゝ

何ゝなれば、佛語は眞實決了の義なるに由る、佛は之れ實知、實解、實見、實證にして、疑惑心中の語にあらざるが故に、

又たゞひ化佛報佛の來りて凡夫往生の事實を否定せんゝすとも、畢竟して一念疑退の心を生ぜず、何ゝなれば

一佛は一切佛にして、あらゆる知見、解行、證悟、果位、大悲等同ふして少の差別なし、此故に一佛の制し給ふ所は、卽一切佛同じく制し給ふ、前佛の制斷せし十惡、後佛出世して之を行せしむるゝなし、此道理を以て諸佛の言行は相違失せず、縱令釋迦一切の凡夫を指勸して此一身を盡すまで、專念專修すれば、定んで彼國に生ずゝ云ひ給へば、十方の諸佛も悉く皆、同じく讚し同じく勸め同じく證し給はん、何を以ての故に、同體の大悲なるが故に一佛の所化は卽ち是れ一切佛の化なり、一切佛の化は卽ち是れ一佛の所化なればなり、故に彌陀經の一日乃至七日の執持名號、諸佛同じく讚し、同じく證誠し給ふ、されば一切の凡夫、罪福の多少時節の久近を問はず、但能く上み百年を盡し下も一日一七日に至るまで、一心に專ら彌陀の名號を念ずれば、定て往生を得るゝ必ず疑なし、是の故に一佛の所說は、卽ち一切佛、同じく其事を證誠し給ふ也。

是等のお言葉は元より吾々衆生に對して其の範を示されしものなれゞも其處に善導の信念强固熱烈にして向ふ處あた

るべからず、思想の高邁に且つ一切を盡せるもの言外に溢れて居る事が充分に窺はれる。次にまた就行立信に至りては彌陀の本願を基準として廣く往生の行業に就て正雜助正を分別し整理して最後念佛に對して決定正定の業因たるの確信を立てしめられた。

又回向發願心の下に於ては、吾々衆生の願生心の挫けん事を氣遣はれては

此心深く信ずる事、金剛の如く、一切異見異學別解別行の人等の爲に、動亂破壞せられず、唯是れ決定して、一心に投じ、正直に進んで、彼異學異見の語を聞て、猶豫進退することあつて、心に怯弱を生じて、回顧落道して、卽ち往生の大益を失することを得ざれ。

或は又解行不同邪雜の人等、來て相ひ惑亂し或は種々の疑難を說て往生を得ずと云ひ、或は又未斷惑の凡夫、僅か一生の修福念佛にして、彼の無漏無生の國に入つて、永く不退の位を證悟することは有り得べからざる事なりとの妨難に對しては、

諸佛の敎行、數多くして塵沙に越え、眞識の機緣既に多し、隨情の敎門また何んぞ一ならんや（中略）隨て一門を出る者は、卽ち一煩惱門を出るなり、また隨て一門に入る者は、卽一解脫智慧門に入るなり、此によつて緣に隨て行を起して各解脫を求むるなり。

汝何を以てか有緣にあらざる要行を以て、我れを障惑するや、我の愛する所は、是れ我が有緣の行にして、汝が求むる所にあらず、汝が愛する所は、卽是れ汝が有緣の行にして、我求むる所にあらず、是の故各ねがふ所に隨つて其行を修すれば、必ず疾く解脫を得なり。

此のお言葉は實に勇士無人の境を行くの慨あり、信仰の向ふ處そこには總ての妨難は打拂はれあらゆる思想も信念の堅壘には全く矢が立たない事を示めされた。

上來三心に就て充分道理筋道を立て言葉を盡して吾々凡夫の爲に信心の確立に努められたれど尙更に吾々衆生の信心を守護し願生の心を益々堅固ならしめん爲に二河白道の譬喩を提示された。此譬喩は實に善導の御信仰その儘の活現に外ならず。淨土敎の全面を物語て居る吾々の周圍に起り來る宗敎上の諸有の問題は、悉く此譬喩によつて解決されてゆく。記主禪師は決答鈔に

若此の白道の譬なくんば、凡夫出離の疑、猶もつて殘るべし、ゆえに往生を願ふの心は弱く、現世を思ふ心は強し此人尙生ずべきの道理を、二河白道にたとえ顯はし給へり、深く大師の御意を悟りぬれば、我等が機分に指し當て一分も往生に疑なきこと、本文分明なり、此義を見合はすべし、

此の譬喩は三心の別喩なりとは雖も之れに依て往生の上の全分の疑念は一掃され決定往生の强き確認を獲得す。此に於てか吾々は導師を永久的信心の守護者としてのみならず吾々凡夫往生の上の證認者として仰ぎ奉るのである。

さて此二河の譬喩に對しては吾々共の贅語をやめてかの慧心の先德の御感にあやかり相共に隨喜の涙に咽び奉らん

知道口筆に曰く

傳へ聞く、慧心先德の曰く、此二河に相逢ふことは、人界の受生、その德此に在り、之れを見る每に歡喜の涙、連々として絕ゆる期なし、誠なる哉、若此釋に對して、信心成せざる者は覆器なるのみ。

斯て三心詳釋の後、十一門義に約して廣く九品を釋し九品往生の機類は皆凡夫なる事を述べて、凡夫入報土の事實を釋明し下上品の往生に至りて化佛讃歎の有無、滅罪の多少に就て本願念佛の利益を高調し下々品逆人往生に就て、大觀二經の相違を、抑止攝取の二門を以て會釋せられた。之れに就ては群疑論十五家の異說を擧げ、往生要集又一義を加へ頌義又更に二義を立てゝ居るが、導師の此二門の會釋、最も明晰巧妙である。

次に得益分、流通分を釋して、念佛三昧の功德、特に超絕して、雜善の比にあらざる事を述べては

若し能く相續して念佛する者は、此人甚だ希有なりとし、更に物の之に方ぶべきなし、故に分陀利を引て喩と爲す

若念佛する者は、卽是れ人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なり。

又專ら彌陀の名を念ずる者は、觀音勢至、常隨影護し給ふこと、親友知識の如く、今生既に此の益を蒙れば、命を捨てゝ卽ち諸佛の家に入る、彼れに到れば、長時に法を聞き、歷事供養す、因滿かに果滿す、道場の座豈賒かならんや。

斯の如く念佛三昧の方を高調して行かれる事がやがて觀經本來の精神であり、之れが此散善義の本領であつたのである、それ故付屬の文を釋しては、觀經所說の元意、全く本願念佛にあり、從て念佛を以て一經の宗と爲すべき事を明白にされた。

上來定散兩門の益を說くと雖も、佛の本願に望むれば、意、衆生をして、一向に專ら彌陀佛の名を稱せしむるにあり。

之れ實に觀經の全意を規定した言葉である。鎭西上人は「智人知二智人一」と云はれた如く、全く釋尊の本意を顯露に示された御言葉、吾々は此に於て內鑑冷然の尊きお姿を拜むことが出來るのである。

最後に造疏の發願請求、證誠の靈驗をお述べになつて居られるが、そこには親證三昧のお姿も又所謂「生死凡夫智慧淺短」の黑衣僧が「本心衆生の爲にして己が爲にせず」して、永く「慈心相向、佛眼相眷」の眞の善智識として、金色に輝けるお姿を拜し奉るであらう。

敬て一切有緣の知識等に白す、余は既に是れ生死の凡夫にして智慧淺短なり、然るに佛敎幽微なれば、敢て輒く異解を生ぜず、遂に卽ち心を標し願を結して、靈驗を請求す、まさに心を至たして、盡虛空法界の一切の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀音勢至、彼土の諸菩薩大海衆、及び一切の莊嚴相等に、南無し歸命し奉る、某今此の觀經の

要義を出して、古今を楷定せんと欲す、若し三世の諸佛、釋迦佛阿彌陀佛等の、大悲願意に稱なはば、願は夢中に於て、上の諸願の如きの、一切の境界の諸相を、見奉ることを得んと、佛像前に於て、願を結し已て、日別に阿彌陀經を誦すること三徧、阿彌陀佛を念ずること三萬徧して、至心發願す。

實に其態度の眞劍にして嚴肅なる事、只感歎するの外なし、斯くて靈感ありて曰く

既に此相を見て、合掌立觀する事、やゝ久しうして乃ち覺めぬ、覺め已て欣喜に勝えず、卽ち義門を條錄す、此れより已後、每夜夢中に、常に一僧あり、來りて玄義科文を指授す、既に終れば更に復見ず、後時脫本し竟已て、復更に至心に七日を要期して、日別に彌陀經を誦すること十徧、阿彌陀佛を念ずること三萬徧、初夜後後に彼佛國土の、莊嚴等の相を觀想し、誠心に歸命すること一に上の法の如くす。（中略）

上來所有の靈相は、本心物の爲めにす、已身の爲にせず、既に此相を蒙れり、敢て隱藏せず、謹で以て後義に申呈して、聞を末代に被むらしむ、願くば含靈、之れを聞て信を生じ、有識の覩る者をして西歸せしめん、此功德を以て衆生に回施す、悉く菩提心を發して、慈心を以て相向ひ、佛眼を以て相ひ看、菩提まで眷屬して、眞の善知識となり、同じく淨國に歸て共に佛道を成ぜん、此義證を請ふて定め竟ぬ、一句一字加減すべからず、寫さんと欲せん者は、一に經法の如くせよ、應さに知るべし。

以上文に隨ひ義に觸れて所感を述べしが、導師としての眞のお姿は、宗祖にして初めて其處に、明確完全に顯はれ給ふべし、本より吾等如き頑愚の管見、徒らに偉大なる尊德を冒瀆するのみ、唯恐惶の至り、至心に懺悔す、冀くば一切の時、一切の處に於て、慈心相向佛眼相眷して、眞の善知識となり給はん事を念願する已耳。